



十二律目録 七月の部

立秋 丁 夕秋 来秋 初秋 三丁

一葉 七夕星 三丁 かゝ小袖 梶の葉 天竺川 踊 四丁

送り火 丁 子市 盆 大文字 盆 供魂 柳 此 五丁

柳 蓮 飯 燈籠 墓参り 六丁 新良 萩 七丁

桔梗 女郎花 萩 木槿 唐 八丁

草 瓜 蕉 牡丹 根系 蓮の実 九丁

西風 龍田姫 稻妻 残暑 花火 十丁

角力 秋風 霞 十一丁 虫 十二丁

きりく 寸 蛭 鈴 燭 残 十三丁

八月の部

發育
 名月十四丁
 久好月十六丁
 同十六丁
 芒花野十七丁

稻の心 稻 野良 六丁 志をよ 芙蓉 蕎麦 鬼灯 葛 十九丁

鴈 啄木鳥 鶉 子丁 鷓鴣 放生寺 蛇穴入 鹿 廿丁

わづる
り乙サニ
案山鳥
鳴子
下り鮎サニ

野分 今年米若煙草夜長 廿四 砧落水夜寒 廿五

九月の部

菊 廿六丁
 紅葉 廿七丁
 木孔子
 未枯 廿八丁
 栗
 柿
 後の月 廿九丁

清
迂宮
新酒
秋の暑
三十一
秋の氷
清時雨
秋の心
清
三十二

此の山
秋
秋の空
秋の雲
冬
初
り秋

三二丁

俚諧十二律

七
月
の
部

立秋

秋
つ
や
お
う
れ
ぬ
家
我
新

素
心

秋
より
肺
の
皮
を
越
す
程
よ
史
千

秋
うやね
うやね
うやね
うやね
洞天

其
秋
害
如
物
奴
風
朗

秋うつや浪の静さの浪はう
 茶静
 蓮の香は流れて秋うつ禁られ
 一葉
 秋うつや静さよや恒より静
 久藏
 秋うつやあそび静しき静
 洞天
 秋うつやさつさつ静の二ツ刻
 史子
 秋うつやさやあそび二日月
 洞天
 浮きつ佐世の船櫓秋やう
 一葉
 藤の静さうのうて静さぬ
 茶静

秋うつやまを流るるてかーつ
 風朗

と静秋

楓むらあけ静さうと静の秋
 茶静
 か秋のうさ来てえゆあはの秋
 ハ奈
 と静秋よりうさあそび
 風朗
 静りてあそびなまきやうと静の秋
 ハ奈

来々秋

雨となつて秋の来々う静さう
 唯令

来々や来ぬ秋を憂ふ潮ゆり 茶静

秋の来しはわく夕やあけなう

秋の来て月もあけぬさうな 一色

當年子よ秋や来よりん秋はるき 風朗

秋

秋の来しはわく夕やあけなう 洞天

そつ秋はふれて池の流さる 風朗

秋や遠る灯照てる水 洞天

一葉

桐一葉あつちうもなうとあり 史子

桐一葉あつちうもなうとあり 風朗

一葉つ桐をばそれと大抵子 日人

ちうちう桐をばそれと大抵子 一色

ちうちう桐をばそれと大抵子 風朗

三葉のうら一葉のうら 素志

和まうらうも偈は似合し 一色

七夕

七夕や禁下町のみききき
七夕はきききあきあききき
七夕もきききあきあききき
史子

星

星ききき人のきききききき
鯉の尾はきききききききき
星はあきききききききき
一蕙

か小袖

か小袖きききききききき
日人

梶の紫

梶の紫やきききききききき
ハ奈
梶のきききききききき
一々

天女川

天の川きききききききき
素衣
曉やきききききききき
ハ奈

涼しきよ誰も仰向く天は川

久臧

やがたるの覺てもーと水川

一色

押のきやき消はぬと水川

風朗

踊

踊ふふおれおれ踊りう都

雪歌

雷は追ち〜を〜かな

ハ奈

鳴みへ押あま〜踊りう都

史子

い〜う〜びす〜い〜踊りい

久臧

松の根を除く踊ふふおれ

素心

追火

追やや振れ〜人通り

素心

む〜火れわ〜や本帰細

一色

送り火

送り火や送り火の山な〜

史子

草市

草市やかくれえ〜つ橋たき

ハ奈

盆 大文字

盆供

みふふおとそをるや盆燈を
う布

何向くも杖をいりやス又子
久臧

見かれ道くまはす盆供哉
う布

魂 柳 山の馬

魂柳の唯一日るかひ希
久臧

新甲へ鼻曳ひけて山の
茶都

悪癒ちそわなるうらぬる
ハ奈

柳 経 蓮飯

柳経や傾城町を一旦都
一々

いそがし中子もうぬ蓮の飯
、

燈 籠

茶の合ぬ海りも盆に燈籠
久臧

高燈籠本辻のうら見ゆる
茶都

雪のけしと格ふも切籠うな
素花

吉原の燈籠は花のまじり
 一葉
 けしきも世にあらば切花
 日人
 かゝ灯も立ぬ燈籠の
 雄令
 はねあゝ燈籠は木は同じ
 史子
 橋下で遠く里や高燈籠
 ハ奈

墓より

聖日人の子はついで墓より
 日人
 花はゆき祢宣は墓より
 一色

朝日

極世ぬ朝日あはれか那
 一色
 朝日や初花あはれ
 三布
 朝日の度とやえん草花朝
 素花
 世も来て朝日も朝日
 系部
 朝日の地を這ふは又
 雄令
 朝日のついで見てみ
 史子
 朝日や我朝見ては嘆はう
 風朗

お良や茶を入るる又一ツ 一々

お新又茶糺ふーや血さはち ハ茶

茶

ちの茶記を茶めあうね 一茶

しーてもかへ茶やー茶の茶 茶茶

茶めー茶をお合にめ茶茶 ハ茶

茶の茶の茶の茶の茶の茶 日人

十足はと茶を茶の茶の茶 布

茶を除きて茶の茶の茶の茶 茶茶

茶向茶の茶の茶の茶の茶 一々

茶はーく思ふ茶の茶の茶 雑令

茶の茶の茶の茶の茶の茶 久藏

茶ーこそ茶の茶の茶の茶 史子

茶梗

茶の茶の茶の茶の茶の茶 風朗

茶の茶の茶の茶の茶の茶 一々

女郎花

かゝてももう折るゝ	女房を	風朗
けりやうそわけてけり	女房を	一色
折ちゝなきて又おゝ	女房を	素心
そゝきてわゝるゝ	女房を	日人
わゝるゝ	女房を	茶静
山原くまゝ	松より	一色
あやゝ	虫の喰ひ	ハ采

聖のあや波人もな記をいへ
一色

萩

傾城のあや	萩のあや	茶静
けりやうそわけてけり	萩のあや	素心
あや	萩のあや	日人
萩のあや	萩のあや	う布

築紫浮行跡の記

けりやうそわけてけり
史子

木槿

つゞく日け蒼く木槿うな 久戒
急なく本をうけ木槿哉 風朗
折くはあふのさめもやま 素志
を根替やまなつふやけ 一色

唐

やあのかはあや唐 素志
門まのまもんはすや唐 旧天

唐くは言つて忘るアかぬ 茶抄
夢よぬきて唐くは夢り通る う布

草の花

流よ咲ふもけうけうまけぬ 一蕙
つくは野を咲はきり草のさ 一
田かきうへ咲うけうけうまけぬ 唯令
ねるつけよ咲ても秋を根絶ま 八束
草花むおりのあふて折をぬ 風朗

芭蕉牡丹分根

秋をよく思ひ切ふはとせびうね
う布
春の同らさなきとせびうな
日人
さふそくは牡丹かふと風の伝
ハ朵

糸山蓮如実

ほめられも笑ふことせぬ糸山を
う布
如きや糸山よく記えをけり
旧天
蓮如実と人魂と花散れ
う布

西山就田雅

寺入け子の名もつゝ西山を
素志
けふもけ日の入るや就田雅
久臧

稻妻

稲妻は涼くえなすや脊戸を
旧天
稲妻はあそ一流う大けり
素志
稲妻はや雷なりと波の音
久臧
稲妻や人をあしづけはやく
風郎

残暑

三日月おいつう見なさん秋暑い
一
何事な記させ城のうへお暑哉
史子
留外のお入秋お暑とかぬ
う布
随一お暑きとれ敷か
ハ奈

花火

度おめく線香花を焚く
日人
花火見一人や多おなさんぬ
久藏

角力

角よ目れさしてお勝角力ぬ
素心
角力取所を越えぬと云ふ
久藏
勝角力人お勝をきうけり
日人
角力取れとせぬと勝つる
史子

秋風

秋風や新へ突込つて
茶子
秋風やつてはねも落の娘
ハ奈

りえやむようえは秋の風

一葉

秋風の吹まじりあり油照り

一色

秋のふやみ所きこぬ様は元

素衣

栳垣より栳垣より秋のそ

ハ糸

雨

雨を〜やぬきそぬきよきれこ

ハ糸

ねく雨やう〜なく見ゆる物もほ

一葉

かきそめけうそぬき〜雨の玉

ろ布

雨は日のかな〜やうきなるう

久減

ま〜けて雨はなるうきと山の雨

碓令

ふ〜と雨と思つ〜雨は元きこま

一色

と雨虫の音を〜雨は元きこま

久減

夕山〜やかく〜雨は元きこま

ハ糸

う〜と雨は元きこま〜雨は元きこま

素衣

雨〜雨は元きこま〜雨は元きこま

使者

か雨の果々ちげ〜雨は元きこま

雪朗

虫

かきよき原村お仗う那 八束
人々ぬて稲妻やきてお花 久成
風のうき啼や町中お虫の歌 一蕙
かきよき啼や町中お虫の歌 一蕙
明方や小波よなつて虫けり 一色
虫さつて教かまきと袖の秋 八束
才えとむし啼むすやまの歌 素志

きりぎりす

折くきりぎりすお花さきりぎりす 風朗
二つおつてきても啼ききりぎりす 日人
きりぎりすお花さきりぎりす 八束
お花さきりぎりすお花さきりぎりす 一蕙

蜻蛉

蜻蛉やお花さきりぎりす 一蕙
雷と轟なくきりぎりす 一蕙

かさくとしづのまゝ小海哉 一葉

蝟 残る蚊

目くくやふふは世に松竹月 素衣

秋の夜や故よりまゝのこころ 風吹

八月記

待宵

秋宵の月をいれ月夜うな 素衣

秋宵やうろはしの松竹風 布

名月

名月や露もえやふは利 素衣

名月になつて仕止ぬ夢の月 風朗

名月舟くまの松

茶
靜

名月や粟廬もなほ萩芒

洞天

雨如中名月一寸とあはれう

風朗

之、
其、
也、
名、
月、
抄、
女、
書、
也、
な

曰人

名月如明二月長端正哉

碓令

名月やほととぎすの宿

う
布

方名月社藥家方

久臧

名月如木間をさるるまうな

一
之

名月や字本又かゝる人の類

素心

名月これ思ひなり寝のそ

う
布

名月院やばうとそで城の巻

史子

名 月 也 ち り か し と ち り
作 男

一
萬

夏月如一足を本の間へ

風朗

卷廿四

曉粧の光つて来るけし月の

茶
新

か、き
披寸やうは
きりぎりす

八
榮

十六宵

十六宵やうきもあはれもあはれ 風郎

十六宵とてふもあはれききり 史子

裏とて今いさううせれおれ 茶静

十六宵れ月入時といさよいぬ う布

月

とくはく病なう月見え 一蓮

月のきやうきもあはれききり 一色

十日ほど月西入秋の月 日人

秋とて秋のききりも月見え 雅令

くわくも換振なうやなれ月 史子

二ツなきも月を自由な月見え 一蓮

ひき一ツは月のききりもあはれ う布

二夜とてあはれうて月れ一板を 雅令

度次より

月れききりや近くあはれ 素花

お読て登を被いし月見えれ	一蕙
何所へ取の文て你に月おま	唯令
ほめくと月をきけり月お山	可布
月えり孫を重人か来す	何天
用しよを月を孫手り	史子
志ちくハきき記月お山	一蕙
月お山とて月おのなるをあり	唯令
月さ寸とねるを月お山	何天

お月お山とて月おのなるをあり	可布
之月お山とて月おのなるをあり	一蕙
月の船て月お山とて月おのなるをあり	史子
川さり月を月お山とて月おのなるをあり	風朗

芒

田中よそと月の芒を	素心
お月お山とて月おのなるをあり	史子
りさお山とて月おのなるをあり	唯令

今様と芒よとありはれき 曰人
 夢ふれと狗のうしろれ芒かな 茶都
 笠きてもえゆる芒れ夕ア弘 唯令
 歩一坊や何とも答つと得越し 何天
 むすむわすまよ芒れ這入に ハ朶

花野

傘下のうふき芒野うな ハ朶
 吹きくやうな日暮るも此に 茶都

稲の花

日けさぬふきなまぬ稲の花 う布
 稲のふぬふきなぬ稲うまき ハ朶
 田乃けふらぬ稲す稲のむ 一蕙
 わく坊や起さばくや子稲のふ 一々
 夢荒くても薙りや稲の花 史子

稲

稲の波きくかき来て枕き 素衣

於しとらええのち縮を縮めく 久減

宇治殿の柱みちつ結い縮 ハ朶

船棹や縮の造れ風おさへ

鶺鴒

鶺鴒やむきもくふの形り 一々

鶺鴒の足えて披すや船切と 茶舒

鶺鴒やけをくくも目けつと ハ朶

志をに 芙蓉

德利又志をにちり掃除部屋 洞天

風吹ぬにちちぬ志をにちり 唯令

菴崎や志をにちり掃をちり 史子

結梅なりを度りてふ芙蓉ハ 朶

若葉む

巨和りさへふけとをきくそはちふ 唯令

葉苗を畝にちりやそそめむ ハ朶

池の底血ほくけく抱えぬ 素志

鬼灯

鬼灯もむーほくみやまぬ 一蓮
ほくつれやもれ のふは桂さく 八采

葛

葛ぬ糸今ぬぬけく桂の底 史子
ふーぬさふさくふ葛ぬ 日人
やくつぬ本もは折ぬ葛ぬ糸 八采

鳳

ほくみ見ふさるやふふ糸 洞天
近こてわふはさるさく 茶静
畑あつ行義てはさく 素志
いつふさく起くさくさく 弘朗
ほのさくやーもくみふ屋 日人
ふふ月近き同さく 洞天
ふ啼やふのお場さく 史子

厂啼や木小唇の壁よりけしと 一
なつかしきうきやわら 日人
厂鴨の来ぬ先よりぬえぬ 風朗

啄木鳥

木つねや返さうもわい木へう 八
木はききよ機の上へて枝う那 茶静

鶉

啼きよきききききききききき ち布

入お水清なりき里や啼鶉 素心

鶉

百舌も啼や西日よりし志の庭 雄令
新顔よいそやうとあう鶉のう 風朗
新啼やよけはれぬもセツ起 史子

鳴

鳴突よ顔あそせう言わく 史子
立鳴の顔よりけしやも撫の灯 素心

放生會 蛇 蛇入

おろし人にかいつてせぬや放生會
う布
穴より入蛇えゆるまで 見送りぬ

鹿

啼し鹿や鹿のしつ灯をふさぐ
素心
鳴る鹿のしつ枝木のかげに
ハ朵
啼し鹿と行きふ鹿を遠く
史子
小男鹿とたはぬ鹿を妻と武
系子

鹿よゆいさるるるるるるるるるる
風朗
物あしはもれて高し鹿のき
一毫
鹿笛や蹴つては枝のかげ
う布
無動くかしをくし鹿のき
久城
はきと啼し鹿をくし鹿のき
洞天
鹿のき候きの新枝又えゆふ
茶静
月の鹿うかしをくし鹿のき
う布
鹿鳴や今もくしをくし鹿のき
會歌

宿つぬうちかゝ啼や筆お席 日人

渡り鳥

十ねほど晴きふんやほり鳥 八束
ふ〜や〜う〜来て居たり 久藏
とつや〜ふ〜れ〜う〜る 史子

行し鳥

長旅を忘れてらけし鳥 日人
降りぬえぬゆくこゝる哉 八束

桑山子

今日きこ〜も〜夕ア 風郎
か〜そやええてか〜此甲斐もほ う布
吹あれていさ〜れ〜か〜れ 素衣
雌さつ〜形りまたき〜か〜哉 一色
けけや耕の小田も立〜 一蕙
藤のさ〜ふ〜か〜な〜う〜あり 日人
泊り合ふ懐利も投げ〜 史子

子

或かと鳴るお間のくさうれ

布

みちのくぬの桐葉うは息

一筋に清くくも或鳴るかな

史子

給人の内澄つなく鳴る子郎

日人

下り鮎

まゝや淡より下り鮎

素志

川上といふも秋を鮎さし

ハ采

野わさ

湯かきんを浪浪のまえるおふい

史子

おやまをなやわさのけりや

洞天

子郎のぬけはと飲盤わけな

布

湖のちて稲押盤わさう事

風朗

おき

おきや畑よりとておき

久藏

おきやちろかりは筆のや

茶野

秋を

光おのゝかぬ秋れきさ哉 日人

今年米 着博草

船や見おろし今も米 八束

ほろこも妹嫁でけりわう甚、

秋も

永きおら夜の実傳ふ常くれ う布

もに夜も一夜ニ夜に終りぬ 日人

とき取の春は晴れあそぼう 久城

と記す木の葉地を揺るも秋な う布

砧

似てるの海へ文切きぬ 風朗

よも良をせせてうなりき 砧 日人

渙のれき取ゆとえて砧うぬ 素木

落し水

門ちをるれそわつるやせし 風朗

一 漏ちぬるを以て落し水
人かゝるを以て落し水

う
存

夜寒

多しよまゝてはあつく秋をい
 秋をさやましく動く葉の
 度つて秋をさくく秋をかな
 秋はあつとく秋をい
 小石をすうして秋をい
 洞天
 久藏
 史子
 茶野
 洞天

洞天

歌をたやきく動く葉のほ

久臧

度了了疎をくく聴きかな

史子

夜をい

茶
新

小
硯
又
石
す
う
ろ
て
一
冊
き
う
ま

洞天

九月部

菊

兼提ふまけ小ま日白の帝
 一歌めつゝと掃や兼如下
 水兼や唯今咲くむけう
 林あろへそ味し如多し菊の心
 一夜さよま帰咲ぬ兼けを如
 史子

風朗

一
跡
め
ア
ー
々
掃
や
葉
如
下

洞天

今もや唯今もや

布

林
あろへを
吐しけ
多し
蜀の
公

一色

一夜さへも帰らぬ筆に如

史子

桑也む神代きぬら口をーき 一葉
 時ふ份ふうや菊又唐のー 久城
 菊えふも凡えふてふそれぬ ハ桑
 秋まふ添てかきり桑めされ 何天

東武重陽

天名又押されて六帝つ桑れう 日人
 羽れふか露申桑れ白いろう 素花
 秋ふそ故のつようう菊れむ 史子

小者又添うく度や跡れ桑 何天
 照り込てけううも黄く菊のふ ハ桑
 此桑々山ても咲とえふれう 史子
 菊折ふかおーて亭主起ーなり 素花

和桑

本丸々むーしきうれぬ桑うね 史子
 うかひの時々ききや初ね桑 雅令
 けけ々も月々あふまみちうな 素花

おきえやつれとまゝくは仕度　ハ茶
まゝいひまゝいてお茶さるゝ事
まゝて色折られて色はる哉　難令
栗端と大工と度ゝまゝちん　日人
水廻れ日和りよ叶ふお茶くれ　う布
厚お茶ちんお茶日けとるまゝ　一色

通天橋

残喘て吹つけてはるお茶くれ　史子

弘原に飛這とれお茶くれ　茶静
船見も橋や松林下お茶　日人
一日おうちをぬ茶の夕ア哉　難令
集まうと度りをちんお茶くれ　風朗
ゆるりゆるりゆるり　ハ茶

去同崎をへ杖を曳く

村々のゆるりゆるりお茶くれ　史子
お茶くれと静もつるお茶くれ　風朗

木れ子

茸や互に歌く番やうら 一
猪垣や船の国々ぬ木の子山 茶
杉茸や詠の者々宿す家 日人
雲茸を極る言似す 雲れ

未枯

うづ枯と来れけしうづぬさ 史子
うづ枯の毛及畑や江の南 一

栗 柿

小庭又茸けさ栗うづう 万布
人の来て法さかちけり柿 風朗

後の月

小軒け焚て海すや後の月 旧天
本町々市け焚りや後の月 史子
足るけふ思義ふく後の月 万布
後の月山を越ぬと湖をさ 茶野

雨月十三歌

せえてくれ三日の朝ほときけ月 八条
うらやうに月うらやまの月 史子
あふせは終りてえふはの月 洞天
後れ月菴の詠とて来より 万布
奥山より月も十三歌 素心
蒼空に押えておるはの月 風朗

清廷宮

清廷を唯々清廷深き風朗
咽々すはは海はー清廷を 史子

新酒

あゝ川の音をうたひ新酒は 素心
香はめつゝあては新酒をぬい 久藏

秋暮

秋の暮つゝなつても秋の暮 風朗
暖やふけふえ給へ秋の暮 万布

山と名をかしと里の秋の暮 史子
 夕庭をけし我なり秋の暮 茶静
 答ふに後よとれありけの暮 一
 順くよきて来るや秋の暮 日人
 時のうちろくせよ 秋の暮 雄令
 秋の山ハをなれよ暮けり ハ采
 山伏の山よ入るり 秋の暮 素衣

秋の暮

ちよきと落来る暮や秋の暮 ハ采
 落く秋の暮くもや秋の暮 河天
 秋の暮見よとすれとる暮 茶静
 百とれよえやや秋の暮 う布
 子子れ動きよにやけの暮 河天

秋の暮

茶の列にあらはれ 史子
 ちよはれてけしちよはる暮 日人

秋の雨

是れぬ日れ暮れはけり秋の雨 一
うふくてはくき秋れ雨をな 久

秋の山

あやめや土は枯れはけり子売 風朗
あやめやるは藤はよつたけり 史子
清くはてはさやめなる山はけり 唯令

秋の山

九月十二日芭蕉忌をうけ
あやめはけり

あやめはけりあやめはけり 茶静

あやめはけりあやめはけり 日人

秋

あやめはけりあやめはけり 一

あやめはけりあやめはけり 日人

秋の山

あやめはけりあやめはけり 茶静

秋の言論なれはあはれなり

茶静

冬待 行秋

冬待や日あけ雲よりありけり

史子

秋はけり恥しき色なりとせし

ハ奈

秋や終るかなき恋もすれ

史子

